

転生したけど出会いを求めるよりダンジョン攻略の方が楽しい(白目)

ジャック・ザ・リッパー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様が、暇なので転生させようと思ひ鈴谷燐（すずやりん）は、ダマのまちのベル君に転生することに！神様にくじ引きで3つ貰った能力は、意味不明の能力。これでどうやって戦えばいいんだ？

よくいる鈍感系主人公です。

息抜き作品を書いたのに息抜きできなかつたので書きました。息抜き作品なので期待はしないでください。

目次

プロローグ	1
プロローグ 2	6
プロローグ 3	11
プロローグ 4	17
プロローグ 5	22

プロローグ

僕、鈴谷燐は死んだ。呆気ない死であった。

死因は病死、昔から体が弱くよく床に伏せていた。趣味はライトノベルの読書。そんな取り柄のない僕が、まさかダンまちのベル君に転生することになるとは思わなかった。

『こっちは娯楽が少ないからね。で、転生する？』

します！もつと楽しいことがしたい！

激しく体を動かしたりするスポーツとか！

『いいね。君、面白いよ！なら、この箱から3枚券を引いてね。その三枚が君の運命を決めるから！』

良し！いいの来てくれ！一枚目、ドロー！

『一枚目は、幸運Aだね。商売とかするときには、かなりいいよ。』

違うんだよなあ。もつと戦闘に役に立つ能力がほしい。二枚目、ドロー！

『二枚目は、製作スキルS現代だよ。簡単に説明すると、君のいた時代のものや技術が作れたり使えたりするよ。でも、使ったことのあるものや見たことのあるものしか作れないみたいだね。銃で無双は無理みたい。』

つ、使えない……。包丁でも作って戦えばいいのか？仕方がない、三枚目にかける！ドロー！

『三枚目は、大当たり！付与魔法だ！これは当たりだよ！使い方は武器に炎を纏ったりすることが出来るだけじゃない！魂レベルまで付与できるレア物だよ！』

おお！なら、ゲームみたいに武器に雷とか纏えるのか！かつこいい！

『これで君は、能力を得た。これから大変だろうけど、思う存分やらかして楽しませてくれ！』

ありがとう神様！さようなら！

こうして僕は転生した。

A月A A日

僕の名前は、ベル・クラネル。

冒険者を目指して努力しているよ！

5歳の頃、自由に行動していい年齢になり、其処らじゆうを走り回った。体を動かすのは、こんなに楽しいことなんだと実感した。

今僕は、製作スキルを試していた。試しに作ってみたのは、野球のバットだ。作り方がわからなく、土を固めて作ったのだが、金属製になつていた。うん、これはチート能力だ。次にドライヤーを作ったが動かなかつた。電気がないことに気がついて現代のありがたさが身に染みた。

2

B月C日

じいちゃんから面白い話を聞いた。近くの森に聖剣が大きな岩に刺さっているらしい。何でも、サイトウと名乗るおかしな名前の男が死ぬ前に突き刺したそうさ。

そいつ絶対僕と同じ転生者だな。その聖剣は、自分以外もしくは選ばれし者しか絶対に抜けないように岩と剣に魔法をかけたみたいだが、突き刺したまま寿命を迎えてしまったらしい。何故刺したのかを

聞いたなら、そのサイトウは背が低く、聖剣が長すぎて持てなかったよ
うだ。哀れだ。

面白そうなのでその聖剣を見に行ってみた。

やはり、5歳の体では回りがあまりにも広くかなり遠く思える。見
つけたときには夕方になっていた。僕は聖剣が刺さった岩の上に乗
り聖剣を握り引っ張る、抜けない。押し込む、微動だにしない。刺
さったまま切ろうとする、動かない。

あまりにも動かないのでイライラして、手回しドリルを作って岩に
穴を開けてその中に自家製ダイナマイトを摘める。ここからは、科学
と魔法の力のかかった岩の大決戦だ！そのまま岩を爆破した。今思
えばこの時、僕はむきにならずに帰れば良かったと思う。

爆破は成功し、岩は粉々に砕けた。僕は近づいて、粉々になった岩
から聖剣を握る。握った感触から勝った！と思った。これで僕は選
ばれし者（無理矢理）になったと思えば、聖剣を抜いてみると、その聖剣
は、短かった。分かりやすく言うと、爆発の影響で岩の圧力やかなり
の時間がたっていたことによる老朽化のせいであつた。

ベル・クラネルは、聖ナイフを手に入れた！

ヤバイ、どうしよう。一応折れたことを隠すために、刃の方も回収
した。刃だけで二メートルあるので重かった。

G月G日

製作スキルで折れた聖剣を直せないかと思つたが、無理だつた。聖
剣なんて見たことないし、ボンドなどで加工しようとしたが折れた跡
がくつきり残ってしまう。

なので発想を逆転してみた。折れた部分で武器を作ればいいんだ
！展示会等で刀を見たことがあるので作れるかもしれないと思ひ
作ってみた。見事に作れてしまった、聖なる刀を。鉄は鍛え直し更に

強度を増し刃こぼれしないので、便利である。まだ聖剣のパーツは残っているが、後で考えよう。

ベル・クラネルは、聖なる刀を手に入れた！

T月V日

やってしまった。

能力の限界を試すためにいろいろ作ったのはいいが、ゴミの山ができてしまった。製作スキルは思ったより燃費はいいようで、限界まで頑張るところなっていた。ここまで作るつもりはなかった。昔、模造品の画像を見ていたので、武器を作れると思って作ったが、やはり模造品の画像、全て武器のレプリカになってしまった。だがそこで、僕は折れた聖剣を思い出してしまった。

作ってしまった、模造品のエクスカリバー（パチモン）を。流石にこんな黄金の剣を持ち歩くことはできないので倉庫にしまった。すまない、エクスカリバー。

VW月XYZ日

付与スキルを試してみた。

包丁に火属性を追加すると、肉が焼きながら切れる。そして僕も鼻血を滴ながら倒れた。やはり恩恵なしで魔法の行使はきつい、十秒も持たない。

魔法の方は、ちよつとずつ頑張っていこう。

A B C 月 X Y Z 日

もう我慢できない！何でトイレが和式しかないんだ！

あの体制で便秘になったら辛いんだぞ！仕方がないので洋式のトイレを家の外に作った。いきなり家の中を工事するのは普通に諦めた。作っている途中で便意に襲われたらいたたまれない。それにじいちゃんに言わずに作るなんて出来ない。

次の日から、村中の人達に洋式トイレを作ってくれと頼まれた。仕方がないので作ると、お礼に沢山のお金をもらった。いやあ、現代技術さまさまだな。

B 月 H 日

僕ももうすぐ十歳になる。

これからのことも考えていかないと。やっぱり、能力だけじゃなくて体の方も鍛えないといけないな。恩恵は0から始まるけど、土台がしっかりしていれば強くなれる筈だ！よし、頑張るぞ！

次のページを開きますか？ y e s / n o

プロローグ2

△月△日

村の村長の孫娘の七歳の誕生日会にお呼ばれした。

プレゼント持参のもと来なければならぬようだ。女の子の誕生日会に呼ばれたことはなかったので、楽しみでもある。だが、プレゼントはどうしよう？村長は孫娘に甘くて何でもほしいものは買ってあげているし、何かいいものはないだろうか？

あつた、製作スキルで作ればいいじゃん。

でも、何を作ろうか？人形？ありきたりかな？服？女の子の服なんて同じようにしか見えなかったからちゃんとしてない。適当にビー玉でもあげればいいかな？無難だし、土丸めれば簡単に量産できる。後は、箱にでも積めてリボンで縛れば完成。

ビー玉程度なら、回りより目立つことはないだろう。

※月×日

懐かれた、村長の孫娘にめっちゃ懐かれた。

誕生日会は、良かったと思う。美味しいものやゲーム等をして遊んだ。中盤でプレゼントを渡したのだが、周りは人形や食べ物等ばかりだった。

ヤバイ、ビー玉僕だけじゃん。周りから『うわあ』って言われながら見られていじめの標的になりそうで怖い。孫娘にプレゼントを渡すと、箱を縛っているリボンから喜んでくれた。孫娘ちゃん、めっちゃいいこや。思わず関西弁になってしまったが、問題の中身を見ると孫娘ちゃんは目をキラキラさせていた。

あれ？これ普通のビー玉だよ？何故か大人たちの目もビー玉に釘付けになってるし、僕何かしたかな？

今さらだが思い出した。この村、窓ガラスどころかガラス自体ないじゃん。ヤバイ、そこまで良いものでもないのに皆から凄い目で見られてる。この村の文明力の低さが怖くなってきた。

×月※日

孫娘に懐かれた日から多くの友達ができた。

走り回って遊ぶのもいいが、頭を使うゲームもしたい。なのでオセロを自作してみた。ルールを説明してゲームスタート！

結果は、当たり前だが僕が一番、孫娘ちゃんが二番だった。この子、僕より3つ下なのに頭いいのね。孫娘ちゃんは、オセロを持って帰っていいかと聞いてきたので、プレゼントした。まあ、量産可能だし問題ない。

△月※日

村長と孫娘ちゃんに嵌められた。

オセロを持って帰った孫娘ちゃんは、村長に見せたらしい。村長はオセロを商人に見せ、商人はオセロを二千万ヴァリスで売ってほしいと言われたらしい。村長は孫娘ちゃんのものだから売れないが、僕が作ったと言ったらしい。

商人はオセロのアイデアを二千万ヴァリスで買い取るそうだ。別に僕が考えた訳じゃないんだけどなあと考え事をしていたら、交渉金額は五千万ヴァリスになっていた。まあいいだろうとオセロのアイデアを売った。

余談だが、オセロは多くの人達に大ヒット、五千ヴァリスで売られ、総売り上げ金額は5億ヴァリスを軽く越えたらしい。

商人は、お礼として僕に一億ヴァリスを渡してきた。

そこまでしなくてもいいのに。

△月×日

暑くなってきたので、今日は川遊びをした。

したといっているが、僕はみんなと離れてじいちゃんが持っている英雄の物語を近くの木の影で読んでいただけだ。それにしてもこの村、子供が多いと思っていたが、孤児院まであるとは。村長が結構お金を持っていて支援しているらしい。普通そんなことしなと思うのだが、孤児院の先生が美人なのを見て納得した。

二時間程が過ぎると事件が起こった。川に足をとられて溺れる子がいた。孤児院の子で狼人の子だ。溺れているとわかると、孫娘ちゃんは川に飛び込んで助けようとしていた。結果、一緒に溺れていた。ミイラ取りがミイラになるとはこの事だ。僕は、紐で括った空のペツ

トボトルを作って二人に投げ、引っ張りあげた。二人とも無事で良かった。

村長にお礼を言われた。

何か困ったことがあったら言ってくれと言われた。僕は、救出したこの二人を冷たいから引き剥がしてくれと頼んだが、笑顔で無視された。言ってくれと言った傍から無視かよ。

×月△日

もうすぐ僕も15歳になる。

付与魔法もちゃんと練習して十秒持たなかったが十五秒持つようになった。じいちゃんが英雄の物語を読ませてからハーレムハーレムと言っているが、奥さんだけじゃ満足出来なかったのだろうか？

倉庫を整理していると、埃を被ったエクスカリバーを発見した。ごめんね聖剣ちゃん、素で君の存在を忘れていたよ。ナイフと刀にしか気を取られてたわけじゃないからね。僕は、エクスカリバーを磨いてあげた。

※月△日

じいちゃんが死んだ。

死体は見つかってはいるが、モンスターに食われたのだろうと言

われた。やっぱり、家族が突然いなくなると辛い。もう日記を書く気が出ない。
もう寝る。

次のページを開きますか？ y e s / n o

プロローグ3

○月○日

今日もやる気がでない。

何も食わず、ベットに転がりながら一日を過ごした。

じいちゃんが生きていたら、多分怒られるかな？やっぱ一人は寂しい。

もう寝る。

◎月●日

今日はじいちゃんのを整理していた。整理していると、一冊の本を見つけた。じいちゃんは、良くこの本を読んでいたなということを思い出した。

かつこいい英雄の物語、じいちゃんは僕にダンジョンで出会いを求めろ、そこで女の子を助けてハーレムを作れと何時も言っていた。

じいちゃん、僕には無理そうだよ。じいちゃんが居なくなつて、一人になった途端に悲しくて一人じゃ何も出来ないんだ。今も一人で泣いてしまう。

今日は、もう寝る。疲れた。

○月★日

今日は、埃を被ったエクスカリバー（パチモン）を磨いた。今日も、何も食わず一日中剣を磨いた。

日が沈み、夜になってもエクスカリバーは淡い光を放ち続ける。まるで、僕を慰めてくれていたかのように。

本当に慰めてくれるなら、人間だったら、家族だったら良かったのに。そう思いながら、僕は眠りについた。

近くに置いたエクスカリバーの光が、消えたことに僕は気付くことはなかった。

—あたたかいね

—やさしいね

—やさしいキモチが伝わってくる

—だからやさしくなれるよ

—やさしく育つよ

—どんな風になろう？どんな風になって欲しい？

幸せになりたい。

寂しいんだ、悲しいんだ。

でも、それでも始めないと。

じいちゃんのを、少しでもいいから受け継ぎたいんだ。
でも、一人は辛いんだ。

—うん、わかった

—あなたが幸せになれるように

—本当の笑顔になれるように

—産まれるよ

目を覚ますと、何時も通りベットの上だった。

1つ違うとしたら、食べ物匂いがした。僕は泥棒かと思ったが、肉を焼いている時の油の音が聞こえる。誰かが肉を焼いているのだ。僕は、そつと近づいて料理場を覗き込んだ。

そこには、僕と同じ銀色の髪に赤い目をした僕よりも一回り小さな体をした女の子が肉を焼いている姿だった。僕のお腹は、久し振りの肉の匂いに反応してグウウと鳴った。それに気付いた女の子は、僕を見て笑いながら言ってきた。

「もうすぐ朝御飯が出るから、待っててねベル。」

☆月◇日

エクスカリバーに魂が宿った。

原因は、僕の魔法が勝手に発動したためらしい。まさか、神様の魂レベルまで付与出来ると言う伏線をここで回収することになるうとは。

彼女は、僕の願いを叶えるべく僕の姿を元にして体を作ったらしい。名前はエクスカリバーなのかと思ったが、エクスカリバーは彼女にとっては種族名のようなもので名前はなく、剣としての性能は創作物の創作物、アニメで見せた性能の5%位が限界らしい。

僕は、彼女にエクスカリバーを文字ってイクス・カリバーンという名前をつけた。

じいちゃんが死んで、イクスが産まれてから、僕は初めて笑えた気がした。

◆月□日

僕は決心した、迷宮都市オラリオに向かうことを。じいちゃんの想いを受け継いでハーレムを作る！これが今の僕の目標だ。

一人なら無理かもしれない。でも、今はもう一人じゃない。イクスがいる、何でも出きる気がする！これから長旅になるだろう。次の日記はオラリオについてからだ！

▼月▽日

何処のファミリアも入れてくれませんでした。

可笑しい、確かに僕はひよろそうに見えるかもしれないが、僕の姿を見ただけで君に才能はないと言ってくるって酷くないだろうか？落ち込みながらも多くのファミリアを回ったが、どこにも入れなかった。ヘステイア様も見付からない。

生きるためには金がいる。仕方がないので僕は、冒険者ではなく商人を始めざるをえなくなった。まずはジャガ丸くんを売るバイトをしよう。

△月▲日

ジャガ丸くん、それはジャガイモをそのまままるごと一個を油であげる食べ物である。レパートリーは以外と多く、バターや塩、小豆クリーム等様々だ。

故に僕は思う。ジャガイモをそのまま油であげるだけの食べ物に
なんの意味があるっ！と。

僕はバイトを辞め、ジャガ丸くんを研究した。より美味しいジャガ丸くんを目指して。そして完成した、ポテ太郎君とポテチ様を。

この二つは、前世のフライドポテトとポテトチップスが元になっているが、この世界には存在しなかった。僕は早速、試食してもらいこの二つをジャガ丸くんより少し高めの値段で売りに出した。

結果は見事に大繁盛！今までにない食感が多くの人の心をつかんだ。やがて、他の商人からポテ太郎とポテチ様のレシピを教える欲しいと集まってきた。

僕は、そのレシピを教えた店の売り上げの一部を貰うことを条件に教えた。結果、僕ベル・クラネルはオラリオで有名な商人となった。

あれ？

僕の考えていたオラリオの生活じゃない（白目）

ベル・クラネル、14才

今だ冒険者にはなれず。

プロローグ4

★月▲日

これは酷い、忙しすぎる。

調子にのってポテチ様を大量生産したら、神様を探す暇すらできなくなつた。売れ行きはよすぎて今のところ別荘家を2、3軒買つても裕福な生活が出来る程集まつてはいる。

イクスも店員として働いてはいるが、二人ではもう店が回らない。少なくともあと一人はいないと。

バイトを募集しなければ。

○月△日

バイト募集のチラシを見て、一人の女の子が来てくれた。小人族の女の子でリルカ・アーデと言う、可愛い。彼女は意外にも僕よりも年上だった。

彼女はどうかやら住み込みで働いてくれるらしい、いい人材が揃つた。早速、働いてもらった。

接客もできて文句などなかった。だが、レジでお金をこっそり猫ババするのは止めてください。まあ、ジャガ丸くんは安いからそこまでお金は減らないんだけどね。

やっぱり日給5万ヴァリスは少ないのかな？

●月▽日

今日は、定休日。リルカさんの歓迎会をすることにした。リルカさんには、今日の夜まで出かけてもらい準備をする。料理は、現代人である僕が作った。カレーやコロッケ、寿司や天ぷら等様々なものを作った。

一応、この料理は新商品として出すつもりだ。

リルカさんが帰ってきたので歓迎会を始めた。僕たちの行動が予測不可能だったらしく、リルカさんはなぜか泣いてしまった。リルカさんが泣き止んだら料理を食べさせた。美味しいといってくれたので良かった。

だが、イクスがリルカさんに『何故、リルカはレジのお金を少しずつ取っているのです?』と発言した。

その瞬間、リルカさんから笑顔が消えた。今にも泣きそうな顔で僕に向かってごめんなさい、辞めさせないでくださいとしか言わなくなった。理由を聞いても話してくれない。そんなに僕は信用ないのかな?

それとイクス、もう少し空気を読んでくれないかな?

そして、歓迎会は暗い雰囲気で幕を閉じた。

◎月▼日

今日、ソーマファミアの団員が、僕の店で暴れ店をめちゃくちゃにしようとした。

しようとした、この言葉通り未遂なのだが、ソーマファミアの団員が暴れようとしたとき、何時もジャガ丸くんを買ってくれる常連さんと共に金髪の女の子が先頭に立ってソーマファミアの団員を撃退してくれた。

『リルカ・アーデ、お前のことは許さねえからな！絶対にこの店をめちゃくちゃにしてやるからな！』と捨て台詞を吐いていったが、リルカさんは泣きながら怯えていて話を聞けなかった。

店を守ってくれた常連さんたちには、ジャガ丸くんセットをプレゼントしておいた。喜んでくれて良かった。

次の日、リルカさんはソーマファミアに戻ると辞表を書き残してこの店から消えた。

◆月☆日

僕は、ソーマファミアリアに行った、1億ヴァリスと手土産をもって。ソーマファミアリアに着くと、僕は主神のソーマを呼んでくれと頼むが、ソーマファミアリアの団員は僕を追い返そうとしてきた。仕方がないので手土産の中から100万ヴァリスを取りだし『主神ソーマを連れてこい。連れてきた奴にはこの金を全部やる』と言った。すぐに団員たちが走り出しソーマを連れてきた。

僕は、ソーマと取り引きをした。

僕はソーマに手土産を渡す、現代の酒の数々を。渡された酒をソーマが飲んでいくと、どれも美味いと言った。あの酒を造る神が美味いと。当たり前だ、現代の酒は、この時代の酒よりも進化しているのだ。

結果、言い方は悪いが僕はこの酒を交換条件に、リリルカさんを文字通り買ったのだ。

リリルカさんの部屋に行くと、リリルカさんは他の団員から金を出せと言われながら殴られていた。僕は、団員たちに持ってきた残りの金を部屋にばらまいて『屑が、金が欲しいんだろ？この金、全部くれてやるからとつとと失せろ！』と叫んでしまった。

今になつては、金を撒き散らして屑と発言する自分が嫌なやつだと思えてくる。

他の団員は、お金を拾って出ていき僕はリリルカさんを抱き上げると、リリルカさんは泣きながら『何故こんなことをするんですか？あんな大金を私なんかのために捨てるなんて。』と言ってきた。

僕は、リリルカさんを抱き締めて『あんな金、君を助ける事に使えるなら安いものだよ』と臭い台詞をいってしまった。

その言葉を聞いたリリルカさんは、泣き出してしまった。リリルカさんは、お金を貯めてソーマファミアリアを抜けようとしていたらしい。そんな時に僕たちのバイト募集のチラシを見て来たそうさ。リリルカさんは、このバイトの破格の条件に初めは驚いていたそうさ。

住み込み可能で良い給料、休日にも給料の入るシステム、初めは詐

欺かと思つたそうだ。僕には普通だと思ふのだが？リリルカさんは、これならすぐにお金を貯めてファミリアから抜け出せると思つたのだが、他の団員から目をつけられてしまいレジのお金に手をつけてしまったらしい。

リリルカさんは、泣きながら『自分は屑で最低です。助ける価値なんてなかったんです』と僕に言つてきた。彼女は、僕にとってはバイトで社員、家族なのだ。

『君はもう、僕の家族だよ。家族を助けたいと思ふのは、当然だろ？』僕は、ありのまま自分の気持ちを伝えた。リリルカさんは、また泣き出してしまった。

お店に戻る頃には、もう夜だった。

僕の家からは美味しそうな匂いがする。リリルカさんが不安そうな顔をしていたので、僕は彼女の手を握る。リリルカさんは決心した顔で僕と家に入った。そこではイクスが作つていたのであろう料理を用意して待つていた。

リリルカさんは、家に入るなり『すいませんでした。』と僕達に言つてきた。

僕は、笑顔で彼女に『リリルカさん、僕達が欲しい言葉はそうじゃないんだ。家に帰つてきたら何て言うのかな？』と言う。彼女は、涙を流しながら笑つた。

—ただいま、と。

プロローグ5

∞月◎日

今日もまた、金髪の女の子が買いに来てくれた。

いやあ、毎日ジャガ丸くんセットを買ってくれるお得意様になってくれてうれしいよ。最近では、お客さんの少ない時間帯なら世間話をしたりする仲だ。

今日は、少し格好つけてみた。金髪の女の子と話をしていると、小さなお客さんが友達の前プレゼントにポテチ様を買いに来たのだが、少しお金が足りなかったのだ。なので足りない分を金髪の女の子が出そうとしたので、代わりに僕が商品を撒けてあげた。

商人としては失格かもしれないが、人としてはいいことをした気分になった。小さなお客さんや金髪の女の子も笑ってくれたのでよしとしよう。

後、イクスとりリルカさん？何でそんなに頬袋パンパンなんですか？そんなことしても可愛いだけですよ？

膨らんだ頬を指で押すと、口からぷすーっと空気が抜けて面白かった。

◆月★日

定休日。

今日は、リリルカさんに買い物に誘われた。なので三人で一緒に買い物に出掛けた。リリルカさんは、少し不満そうにしていたが時間が

たつと納得したようだ。

それにしても、服などを買ったのだが地味なものが多い。もう少し可愛い服はないのだろうか？

……もう、作ってみようかな？裁縫とかも前世で得意だったし、製作スキルで元がタダだし。売ってみるのもいいかもしれない。

服を買った後は、個人的に気になったバベルに行った。イクスがどの店に行くのかと聞いてきたので、『武具や防具の店を見に行く』と言ったら、僕にしがみついて泣きながらダメダメと首を横に振っていた。

どうやら、自分よりいい武器を見つけたりしたら、捨てられるのではと思ったようで必死に止めようとしていたようだ。

嫌、イクスは贗作でもエクスカリバーだからね。性能は最高クラスの武器だし、家族なんだから捨てないからね。それに、僕が見たいのは防具だから大丈夫だよ。

夕食は、豊穰の女主人で食べた。

どれを頼めばいいのかわからないので、先に金を出してこの金で買えるおすすめの料理を注文した。料理は美味しかったし、美人の店員が多いから毎日来たくなる。

その中でも、シルさんという店員さんと仲良くしてもらった。初めは冒険者と間違えられたが、何故か僕が自己紹介をすると『あのベルさん!』と驚かれた。何故驚くのだろうか？

今日も楽しい一日だった。

☆月○日

今日は、仕事を早く切り上げてバベルに行った。

一人でバベルに行っているわけではない。常連の金髪の女の子と二人で行ってきたのだ。つまりデートと言うものである。

実は、金髪の女の子と話していると、話題が僕が冒険者になったらどんな防具をバベルで買おうかなという話になったのだが、一緒に選んでくれるらしい。意外にも彼女は冒険者らしい。僕の想像では、女の冒険者は大体某アマゾネスみたいに筋肉モリモリマツチョウマーなイメージがあつたのだが意外だ。

防具はヘファイストスファミリアで買うことになった。そこで意外な収穫があつた。黒髪ツインテールにロリ巨乳の少女、ヘステイア様を発見できた。長かつた、やつと神様を発見できた。

神様は明日ファミリアに入れて貰うことにするとして、僕はもう少しデートを楽しむことにした。服を買ったり、ちよつとした小物を見たり、ジャガ丸くんを買って食べたり（よく見たら、僕がレシピを渡した店）、日向ぼっこしながらお昼寝したり（何故か僕が膝枕）、迷子の子供の親を探したりした。本当に濃い一日だった。

△月◇日

やった！今日僕は、ヘステイア様から恩恵を貰い、ヘステイアファミリアの冒険者となつた！

ヘステイア様は、いままでヘファイストス様のファミリアでニート暮らしをしていたらしく、ヘファイストス様は呆れて丁度出ていけと

言いたかったそうだと。心中お察しします。

ヘステイア様は、あつさりと僕をファミリアに入れてくれた。僕が自己紹介をすると、『君って、あのベル・クラネル!?』と驚かれ、ヘステイア様は『やったー！僕は勝ち組だー！』と叫んで小躍りしていた。だから、僕は回りからどういう風に見られているのだろうか？

家に帰って僕が冒険者になった事を二人に教えたと、イクスはおめでとうと言ってくれたが、リリルカさんは、不安そうな顔をしていた。何故か聞いてみると、僕がソーファミリアの団員のようになるのではないかと、僕が死んでしまったらどうしようと心配してくれていた。

僕は、リリルカさんを不安にさせてしまったと落ち込んでいて、リリルカさんは『仕方がないですね、リリがベル様のサポーターとしてお側で支えます！』と言って、ヘステイア様に改宗させていた。

▲月○日

今日からダンジョンに向かう。

僕のはじめの冒険だ。口の中がカラカラになり、体が強張る。そんな僕の手をリリルカさんとイクスが握ってくれた。二人の手の暖かさが僕を落ち着かせてくれた。

今からダンジョンに入り、冒険をしながら強くなり、女の子を助けてモテモテになってハーレムを作る！

じいちゃん、僕は行くよ。多分、僕は物語の英雄のようにはなれないと思う。でも、僕は諦めずに進み続けるよ！

僕はダンジョンに向かって歩き出した。

ダンジョンに入ろうとしたが、入り口でギルドに冒険者登録をして
いなかった事で止められ、ギルドに連れていかれた。
し、しまらないな。